

外国人非常勤講師とグループ設計課題から学ぶことについて

～3年生前期インテリア実習Ⅱ前半課題を例として～

生活環境デザイン学科 阿部 順子

はじめに

本稿は、椋山女学園大学生生活科学部生活環境デザイン学科3年生前期のインテリア実習Ⅱという設計実習科目の、2013年度の前半課題について報告するものである。

この科目は、一級および二級建築士・インテリアプランナーの受験資格取得のための履修選択科目のひとつであり、技術的な学びがあることは言うまでもないが、それに加え、グループワークならではのコミュニケーションに関する学び、外国人非常勤講師と対峙する異文化への学びも含んでいる。その分、大変なことの多い課題でもあるが、履修した学生には大きな壁を乗り越えたという特別な充実感があるようで、2011年から始まって3回目になるが、最終講評会で感極まって涙を流す学生が毎年見られ、就職活動のエントリーシートの「学生生活でがんばったこと」という欄に、この課題を上げる学生も多数みられた。また、この課題について熱く語るOGも多い。

どうやら記憶に残る、なかなか悪くない課題ではないか、と自画自賛したくなるころであるが、実際学生たちはどのように取り組み、どのように成果をとらえているのか、また学生たちの自覚と成績にはどのような相関があるのか、教員が目論んだ達成目標はどの程度達成されているのか、これまで調査分析をしていなかった。この課題をよりよいものとするため、成績評価のために実施したアンケート回答を利用して、これらの疑問を検証してみたいと思う。

大変拙い授業報告で恐縮であるが、本稿をお読みになった教員の皆様からご意見ご感想など頂戴できたら、誠に幸いである。ぜひとも今後の授業改善の糧としてご教示賜れたらと願っている。

課題内容

課題内容やスケジュール、提出物の内容を記した、ガイダンスで配布されるペーパーを添付する【図1】。

本課題は、2013年4月12日から6月7日までの8週間、専任教員（著者）1名、非常勤講師2名が指導し、27名の学生が履修した。イタリア人とフランス人の非常勤講師はいずれも出身国で建築家の国家資格を取得している。そして7年間もしくは15年間、日本で実務や学位論文の執筆を行っており、日本語が堪能で日本の文化や学生気質をよく理解している。また、両氏とも他大学で非常勤講師の経験がある。

本課題は、味噌のアンテナショップ（味噌を知らない欧州人に味噌の魅力を紹介し、将

来の販売を促進するための店舗)の設計であるため、アンテナショップの立地としてふさわしい、非常勤講師の出身国の「おしゃれで情報発信力のある場所」をそれぞれ敷地として設定した。つまり、イタリアはミラノのコルソ・コモ地区、フランスはパリのマレ地区にあるアンテナショップという設定である。空間のサイズは24㎡で統一されている。

130412阿部作成

インテリア実習II阿部担当分 ガイダンス配布資料

【課題のねらい】

- ・仕上げ材や什器、食器、看板など空間のディテールおよびスタッフと客のアクティビティを徹底的にデザインする。
- ・個々の能力を発揮してグループで企画・設計をまとめあげる。
- ・ストレスフルな共同作業のなかで、互いを尊重し、協力し合い、グループへ積極的に関与・貢献する経験を積む。
- ・外国人非常勤講師とのエスキスを通じて、文化の違いを各自積極的に体感する。

【課題内容】

・パリ(マレ地区)もしくはミラノ(コルソ・コモ地区)に、小さな味噌のアンテナショップを計画する。
(味噌を知らない欧州人に味噌の魅力を紹介し、将来の販売を促進するための施設である)

- ・店内・ファサードには以下の要素を必ず含むこと(その他、必要と思うものを自由に足すこと)：

- ①レジ
- ②展示(味噌や調理方法の紹介など、必要と思われる展示物を考えよ)
- ③倉庫
- ④味噌(味噌料理)の試食コーナー
- ⑤看板・ロゴ

【設計対象となる店舗概要】

- ・面積：24㎡(間口6,000mm×奥行4,000mm×天井高4,000mm)
- ・隣接する店舗と街路の写真は、生環課題フォルダ「インテリア実習II」からDLすること。
- ・本アンテナショップは1階にあり、街路から段差なくアクセスできる。

【最終提出物】

A:プレゼンボード (A1サイズ×2枚)

→平面図・展開図・ファサード立面図(各図1/20)・パース2面以上・ダイアグラム・コンセプト・その他必要なコンテンツ

B:模型(1/10)

C:/パワーポイントプレゼンテーション(6分)

D:欧州人に受け入れられそうな、試食用の味噌料理のレシピと実物(授業参加者全員分)

【授業計画】

回	日程	内容
1	4/12	ガイダンス 課題説明、敷地説明、非常勤講師プレゼン、グループ分け、グループ作業
2	4/19	エスキス1 コンセプト発表会(★コンセプトを2-3分程度のパワーポイントにまとめてくること)、グループ作業
3	4/26	エスキス2 エスキス(非常勤+阿部)(★平面図、店舗イメージがわかるスケッチや写真)、グループ作業
4	5/10	中間発表会 PPIによる中間発表会(★コンセプト、イメージ画像、図面(平立断)等を5分のパワポにまとめてくること)
5	5/17	エスキス3 エスキス(非常勤+阿部)(★教員の指示どおり)、グループ作業
6	5/24	エスキス4 エスキス(非常勤+阿部)(★教員の指示どおり)、グループ作業
7	5/31	エスキス5 エスキス(非常勤+阿部)(★教員の指示どおり)、グループ作業
8	6/7	最終講評会 最終講評会(★最終提出物)、軽くうちあげ

★：当日、班で用意してこなければならないもの

【グループ分けと評価について】

- ・インテリア実習II履修者で、4チームを編成する(フランス2チーム、イタリア2チーム)。
- ・個々の成績評価は、チームの提出物のクオリティ+個人のチーム作品への貢献度で算出される。
- ・役割分担を行い、役割からインテリア実習IIの成果物への貢献度が量られる。
- ・あまりに貢献が少なかったとグループの他の複数のメンバーから妥当な指摘のあった者は、事情を確認した上で減点する。

	役割名	役割(コンセプトはもちろん全員でしっかり考えること！)
1	○ 班長・PP1	メンバーへの連絡窓口、コンセプト案のとりまとめ、PP製作・発表
2	○ 副班長・PP2	班長の補佐、プレゼン案のとりまとめ、PP製作・発表
3	○ ボード1	プレゼンボード作成
4	○ ボード2	プレゼンボード作成
5	○ 模型1	模型製作
6	○ 模型2	模型製作
7	○ レシピ1	レシピ考案・調理

※○のついた役割は必ず担当者をあてること。

【図1】ガイダンスで学生に配布されるペーパー

班作り

6－7名で1班を構成し、2班がイタリア、残りの2班がフランスの敷地に取り組むこととした。まず、非常勤講師の各敷地の説明の後、イタリアがやりたい、フランスが好き、というように感覚的に学生に敷地を選んでもらった。その結果、学生は国別に2つ（14名と13名）に分けられた。例年、どちらかの国に偏ることなく、不思議とうまく二分されるのは、学生たちの空気を読む能力の表れかもしれない。

次に、グループ設計を行う班をつくる。ここでは、普段仲の良い学生同士が同じ班になることを禁じた。この課題の目的のひとつがコミュニケーション能力の向上なので、「社会に出たら、誰と仕事しても一定以上のパフォーマンスをあげなければいけません。人の好き嫌いが仕事に出たら、仕事になりません。誰と組んでも仲良くやれるようにこの課題で練習しましょう」と冒頭に班のつくり方の意味を説明する。そのうえで、学生だけで自律的に班作りするよう以下の手順を指示した。まず4人の班長を立候補させ、次に4人の副班長を決めた。そこからは各班、班長中心に、できるだけそれまで付き合いのない学生と班を構成できるよう、プレゼンボード担当、模型担当、パワーポイント担当という役割で班員を募っていかせた。過去3年、この手順で班づくりを行っているが、話し合いは和やかで20分前後ですんなりとまとまっている。

「予防線」を張ることの重要性

本学科では、1年後期より設計課題が各種用意されているが、グループで一案まとめる集団設計課題はこれが最初である。基本的な設計や模型製作のスキルがついてきて、自分の強み弱みがわかってきたところで、また、就職活動を目の前にし、社会へ出ることがリアリティをもってくる時期でもあるので、3年前期はこのような課題がうまく機能できる、よい時期ではないかと考えている。

とはいえ、ただでさえ、期限内に作品を仕上げることは大変なことで、そこに気心の知れない同級生と、上下関係のないなかで役割分担して、分業で一案をまとめあげるのは、相当ストレスフルな課題である。最悪なのは、仲間割れして作品のクオリティも上がらず、その後の学年の人間関係にまで悪影響が及ぶような事態である。これは絶対にあってはならないことで、必ず後味よく乗り越えさせ、自信をつけさせたいと考えているので、十分な「予防線」を張ることにしている。

経験則に過ぎないが、女性はしばしば事前に関わり得る事態について十分な情報が与えられることで、実際に感じるストレスを軽減できる傾向が強いようなのである。そこで、関わり得る「しんどいこと、ストレスフルなこと」とその意味、それを乗り越えたときに得られるであろうものをガイダンスで十分に説明するようにしている【表1】。

このような「予防線」をしっかり張ることで、学生が困難を感じて、それを相談してきたときも「以前説明したように、あなたが今ストレスを感じているのは全く正しいことです。あなたは今壁を乗り越えようとしているところです。これを乗り越えることができたなら、〇〇〇〇が得られますね」と教員に現状を肯定され、学生は納得してストレスを学び

【表1】 予想されるストレスとそれを乗り越えたときに得られるものの例

予想されるストレス	それを乗り越える意味と得られる可能性のあるもの
気心のしれない同級生と作業するストレス	社会に出れば「仲良し」とばかり仕事はできない。誰と組んでも一定以上の成果を出さなければならない。気心がしれていない人でも作業を進めることができた経験は、「誰とでも働ける自信」につながる。
上下関係のない班員のなかで作業を進めなければならないストレス	命令系統がないので、決定権は誰にもない。自分の提案を他の班員に受け入れてもらうには十分なコミュニケーションが必要である。この経験をとおして、提案する力・説得する力・説明する力の重要性を理解できる。
外国と日本の文化的背景の違いに直面するストレス	言語のバリアがないとき、異文化に触れ、積極的に違いを認め、それを愉しめるようになることを目標にする。今回の経験によって異文化への警戒心を減らすことができ、外国人とのコミュニケーションに以前より自信がもてるようになる。
限られた作業時間で共同作業をするストレス	スケジュール管理、協力的な態度の維持、積極的に自発的な姿勢、班員相互の思いやり・感謝がこのストレス回避には必要である。このような要素を実行すれば、ストレスを軽減・回避できることが学べる。

の実感に変換できるのではないかと考えている。実際、毎年、多数の学生が多かれ少なかれ困難を感じ、教員に相談してくるが、このように納得して前に進むことができている。

これまで3年間、班によってはどうしてもやる気のだせない班員がいて、作業量の多寡からくる不公平感で班の中の空気が多少ギクシャクするということはあった。しかし、この程度のトラブルにとどまり、仲間割れや空中分解、作品の未完成や放棄といった最悪の事態には幸い至らなかった。本学科の学生の精神的な成熟度や安定性がベースにあるからこそ、例年成功裏に終わっているのだと感じる。

一方、教員としては、十分な「予防線」を張り、困難を抱えている学生を早急に見つけて随時手当をすることが、この課題の成功には肝要であると考えている。私は男子学生を同様の課題で指導した経験がないので、男女混成のグループ、男性のみグループではわからないが、女性のみグループにおいてはこのような対応はかなり有効であると思う。

アンケート内容

アンケート内容は【表2】のとおりである。アンケートは最終講評会後、自宅などで記入し、後日ポストに提出するよう指示した。このアンケートでは、班員の貢献度を互いに評価し合うことも重要な目的であった。というのも、外から見ていただけでは、誰ががんばっていたか正當に評価するのは限界があるため、学生相互の評価は成績評価に必要と考えた。成績のつけ方の公正さも学生のモチベーション維持には大変重要と思う。

一方、この目的のために、無記名ではなく記名式とした。その点で自身の評価を気にしてきれいごとを書かないよう、以下の注意書きを添えてみた。

- ①自分をよりよく見せようと思わず、正直に記入して下さい。見栄をはっていたり、虚偽がある場合はわかるように設問をつくっています。
- ②成績評価は、図面、パワーポイント、模型、レシピ、本シート、つけてみそかけてみそ作文から行います。
- ③インテリア実習Ⅱの成績は前半課題と後半課題の両方で決定されます。
- ④期限内に本シートの提出がない場合、減点となります。期限後提出は一切認めません。
- ⑤本シートは回収・分析後速やかにシュレッダーにかけます。回答内容は阿部のみ知るものとします。

20ある設問のうち、Q 1 から Q17までは4択（よくあてはまる、ややあてはまる、ややあてはまらない、全くあてはまらない）で回答し、Q18－ Q20は該当する学生の名前を記入する形式とした。

【表2】インテリア実習Ⅱ（阿部担当分）自己評価シートの内容

Q1	自分は一生懸命がんばった！と胸をはって言えますか？
Q2	自分はこの課題をとおして人間的に成長できたと思いますか？
Q3	自分はこの課題をとおして技術的に成長できたと思いますか？
Q4	共同作業のなかで、自分の役割を積極的にみつめることができましたか？
Q5	共同作業のなかで、自分の役割がチーム全体に不可欠だったと思いますか？
Q6	正直なところ、足をひっぱった、と思う部分がありますか？
Q7	正直なところ、手を抜いた部分や面倒なことから逃げた部分はありましたか？
Q8	自分がいなければまともでなかった、と思いますか？
Q9	非常勤教員とうまくコミュニケーションをとろうと努力しましたか？
Q10	他のメンバーに常に親切に優しく接することを心がけましたか？
Q11	他のメンバーから感謝されることがたくさんありましたか？
Q12	他のメンバーに感謝したことがたくさんありましたか？
Q13	他のメンバーと気持ちよく仕事しようと積極的に努力できましたか？
Q14	その努力は実りましたか？
Q15	成果物(プレゼン図面)に満足していますか？
Q16	成果物(模型)に満足していますか？
Q17	成果物(パワーポイント)に満足していますか？
Q18	あなたの班の中で、貢献が極端に少なかった人の名前は？いなければ空欄 (○○○○さん) 理由：○○○○○なので
Q19	あなたの班の中で、コミュニケーションの上で貢献の大きかった人の名前は？ (1位 ○○○○さん) (2位○○○○さん)
Q20	あなたの班の中で、技術面での貢献の大きかった人の名前は？ (1位 ○○○○さん) (2位○○○○さん)

アンケート結果

履修者全体の結果と班毎の結果、班毎の結果と成績の相関について述べたいと思う。A、B、C、Dの4班毎の成績および回答状況は【図2】【表3】のとおりである。

まず、履修者全体でみると、「Q1. 自分は一生懸命がんばった！と胸をはって言えますか？」という設問に対し、27名中21名が「よくあてはまる」と回答した。「ややあてはまる」を選んだ5名を加えると、26名、ほぼ全員が本課題に対して熱心に取り組んだと自覚していることがわかる。

Q2－3では、人間的な成長・技術的な成長の実感を尋ねた。27名中23名が人間的な成長をはっきり自覚している。そういう意味ではこのプログラムのひとつの目的は達成できたとしてよい。27名中14名が技術的成長をはっきり自覚している。85%が人間的な成長をはっきり自覚した一方で、技術的成長をはっきり実感しているのは52%と割合が下がる。学生間で技術を交換するだけでなく、技術的な成長を促す、学生外からの仕掛けをもっと充実させる必要があるようだ。

Q4では積極的な関与を尋ねた。全員が自分の役割を積極的に見つけるよう誘導したためか、これについては成功といえる。

貢献度の自覚を問うたQ5－8では、貢献度高さの自覚と班ごとの成績の間に明らかな関係は見いだせない。女性らしい謙虚さのせいか。「足をひっぱった部分がある」「逃げた部分がある」と自覚しているメンバーの人数の多さと、成績には相関がなさそうである。若者らしい潔癖さ、自分への厳しい評価の表れか。A班の1名が「手抜き、逃げた」ということを認めている。実際この1名については、他の班員からもその指摘が複数寄せられた。正直に回答してくれたことはよかったが、残念なことであった。4班とも、「自分がいなければまともじゃなかった」と思う人数とそう思わない人数はほぼ拮抗している。グループの中で引っ張る人についていく人のバランスがうまくとれていたということだろうか。感覚的でしっかりした根拠のないことを記して誠に恐縮だが、自然にこのようなバランスができるのは女性ならではの気がする。

Q9では、外国人非常勤講師とのコミュニケーションへの積極性を振り返ってもらった。各班とも、大多数が努力を自覚しているが、全員揃って、はっきり努力を自覚している班が成績も一番よかった班である。コミュニケーションを「窓口」担当班員に任せていた班も見られた。それがアンケート現れた。

二人の外国人非常勤講師は、日本語が非常に堪能である。性格も穏やかで指導も丁寧で、教員としても優秀な人材であった。言語のバリアが全くないなかで、どれくらい積極的に異文化を吸収しようとするか、どれくらい外国へ興味を示すか、エスキス中にずっと各班各人を観察していたが、正直なところ、ここぞとばかりに外国人非常勤講師に質問するものはみられなかった。学生達は、淡々と設計に必要な情報を収集し、フランスやイタリアの建築家制度や建築教育などに質問が及んでいる様子も見えず、よくも悪くも、あまり「脱線」しなかった。また、非常勤講師は日本滞在が長く、日本人への理解が深く、文化的な摩擦を半ば自動的に回避したことも、衝突がほとんど起こらなかった理由

かもしれない。

私はフランスの国立建築学校に1年弱留学し、現地の学生とグループ設計課題を通年で取り組んだことがあるが、日本の学生に比べて、フランス人学生は作業が非常に雑で、しかし楽しげで、日本人から見ると全体に過剰過ぎて、日々ショックの連続であった（フランス人学生にとっても、私の作業姿勢はまじめで几帳面過ぎて驚くべきものであったらしいが）。「なんだ、それは?!」とショックを受けることが、異文化理解への入り口であるのかもしれない。そういう意味では、学生と非常勤講師との「衝突」はもっとあってもよかったのかなと思う。

というわけで、言語のバリアさえなければ学生が異文化に積極的に親しもうとする、と思うのは早計であった。国際化・グローバル化が叫ばれ、英語の早期教育が国是とされる昨今であるが、語学だけできても（言語のバリアがなくなっても）、異文化への好奇心や前向きな関与というものは、自動的に醸成されるものではないようである。今回の課題では、設計条件を整理し図面化するだけで精一杯で、異文化を楽しむ時間や精神的余裕がそもそもなかったということもあるかもしれない。今後また、このように国際性をからめた課題を実施するならば、異文化をもっと愉しめるよう学生の精神的・時間的余裕も勘案して、「衝突」の機会をつくったり、スケジュールをゆったり目に組んだり、最終提出物の内容を減らしたりすることも考えたい。

Q10-13ではメンバー間での和やかさを保つための働きかけについて尋ねた。成績上位2班では、全員が他のメンバーへ親切に優しく接することを心がけ、感謝し、感謝されるというよい循環が維持されたことが伺える。一方、成績下位2班では、それができなかった少数のメンバーが存在したことがわかった。

もっとも成績のよいチームは全員が、快適な共同作業へ努力し、その努力が実ったとはっきり自覚していると、Q14への回答でわかった。快適な共同作業への努力があまりできなかったと自覚しているメンバーがいない2班が、成績上位の2班である。

Q15-17では、成果物への満足度を尋ねた。成果物への満足度の高さと成績は、講評会での講師のコメントの影響があるのであろう、成績のよい班の満足度が高くなっている。図面とパワーポイント（以下、PP）では満足していない少数がいるものの、模型については27名全員が満足と表明している。特に模型への満足度が高い班は、細部まで最もよく作り込めた班であった。特にPPへの満足度が高い班は、PPの出来が中間発表時からよく、講評会でももっとも完成度が高かった。

Q19-20は、具体的に名前を挙げて評価し合うものである。この形式は初年度にはなかったのだが、初年度無記名で最終講評会后、課題の感想を学生に提出してもらったところ、「○○さんはちっとも働かなかったのに、同じ班だからといって同じ評価がもらえるのは許せない」といった感想がいくつも寄せられ、班員個々の評価の厳密さへの要望が明らかであった。そこで、相互監視のようでやや気がすまなかったものの、2012年に評価の一部に導入したところ、好評であったので2013年度は一層はっきりした形式で実施してみた。その結果、驚くほど、学生の相互評価は一致しており、各班でコミュニケーション面

もしくは技術面での貢献度の高い人物はほぼ特定の人物が選ばれていた。また、Q18は不愉快な質問であるが、「いなければ空欄」としたので、3班では具体的に名前が挙がっていなかった。一方、ある班では特定の人物の名前と「話し合いへの不参加」等の理由が挙がっており、それは教員の観察とも一致していたため、成績評価の参考にできた。個人的にはQ18のような不愉快な質問はしたくないのだが、一方で、「やる気のなかった班員と同じ評価ではたまらない」という評価の公正を望む声には誠意をもって対応しなければならないと思っている。その最善の方法については、まだまだ模索中である。

最終提出物について

2013年度の本課題の提出物のレベルは例年並みの出来栄であった。経験的に思うのだが、班の数も作品の出来不出来に実はかなり影響するもので、班の数が昨年度の半分だったために、どうしても競い合う圧力が減る分、当初レベルダウンが懸念された。幸い、指導を受ける時間が増えたため、レベルダウンはなんとか食い止められたようであるが、作品数が増えて案にバラエティが出てくると学生相互に勉強になるので、やはり履修人数も授業を組み立てる上で、ある程度コントロールしたいところである。

例年並みの出来栄え、といっても一般的な大学生の作品を考えれば、非常にレベルが高いものと自負している。本課題の模型は、商品の種類やパッケージデザインやショーケースや棚の内容、店員のユニフォーム、照明器具や什器、実際の仕上げ材やディテールの収まりを実際に建てるつもりで考え抜き、テクスチャーまでリアルに表現するものである【図3】。工学部建築学科ではこのスケールと密度で模型をつくることはまずなく、専門学校でもこのレベルに到達することは難しいと思う。学生個人では、同週数ではここまで内容を詰めることは不可能である。本課題で到達できた高いレベルが念頭にあることで、卒業研究で設計や制作を選択したとき、自然と目標が高いところにおかれることも密かに意図しているところである。

この課題では最終提出物として、模型だけでなく、案をパワーポイントで説明し、プレゼンテーション図面【図4】も提出する。自分で課しておきながらんだが、こうしてまともしてみると随分重たい課題である。毎年、最終講評会を終える度、学生達にはよくがんばってくれた、よく乗り越えてくれた、と安堵の中密かに感謝している。

なお、2013年度の最終講評会には実験的に、『つけてみそかけてみそ』でおなじみのナカモ株式会社社長・杉本達哉氏をゲストコメンテーターとして招聘し、味噌メーカー経営者の視点から講評を頂戴した。「アンテナショップとはいえ赤字は出せない、できれば儲けたい、そのためには商品をたくさん並べてたくさん売って、イニシャルコストはもちろん、光熱費・人件費などのランニングコストもかからないように運営したい」といったリアルな視点をご教示頂くことができた。学生はコメントに深く納得し、自らのデザインと現実とのギャップを知ることができたようである。浮世離れしたデザインにならないために、このような試みは重要かと思う。ただし、コストやクライアントの要望が至上なのは社会に出れば当たり前なので、学生のうちにできるだけ柔軟に自由にデザインの可能性を追求

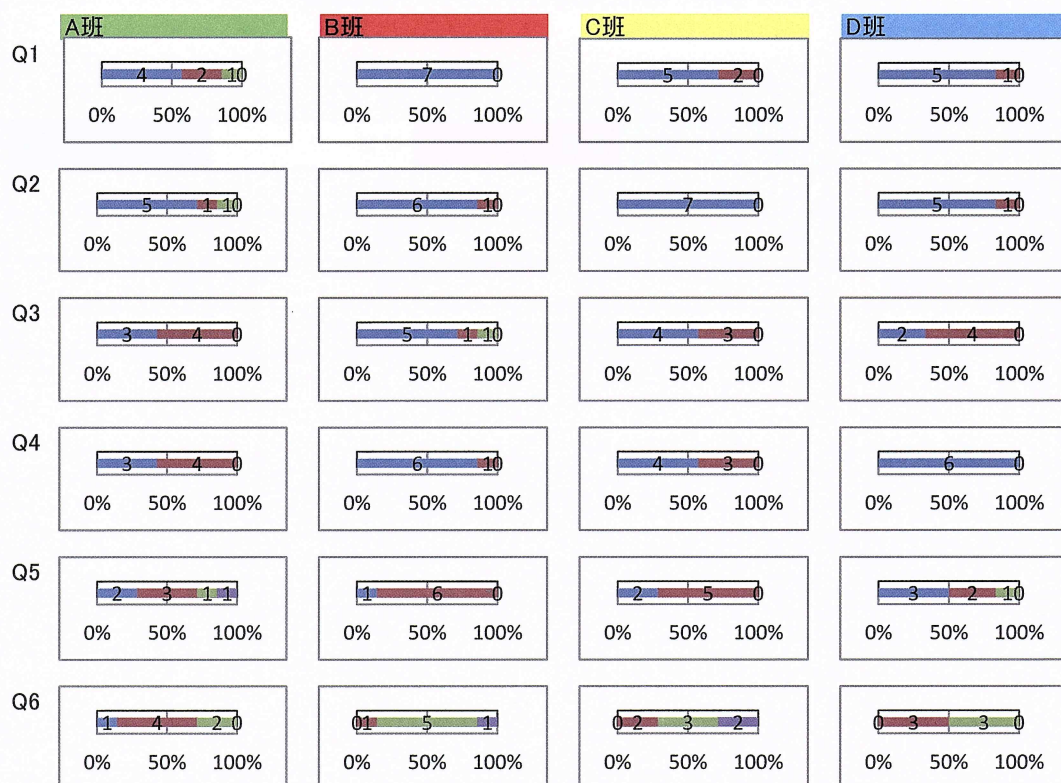
させることが、大学での教育の意味でもあると思うので、リアルな社会のニーズと学生らしい自由奔放さのバランスを授業のなかでどうとっていくかは常に悩ましいところである。

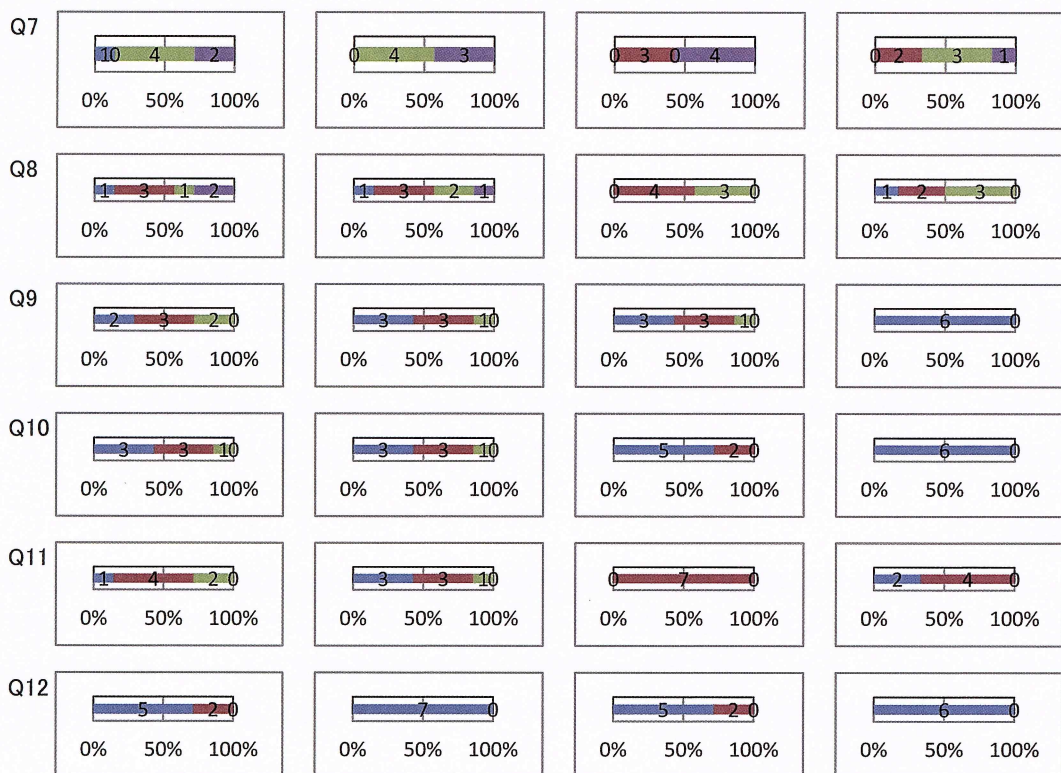
おわりに

本稿は、アンケート内容も主に成績評価用のものを転用し、分析も考察も雑である。グループワークの心理的影響や教育効果に関する既往研究も参照しておらず、甚だ雑駁なふりかえりでしかないが、ふりかえり自体、日々様々な業務に忙殺されるなか、初めての経験であった。まとめてみて初めて問題点に気づくこともあり、執筆は私にとっては有益であった。とはいえ、読者諸賢には、分析や考察に激しく物足りなさを御感じになられることと思い、大変申し訳なく思う。どうかお許し頂きたい。今後は、本科目でこれまで得た知見を活かして、より充実した設計実習をプログラムしていきたいと思う。

謝辞

2013年度インテリア実習Ⅱ履修者27名の学生の皆さん、きつい課題でしたが最後までよくがんばってくれました。お疲れ様でした。ご回答下さったアンケートのおかげで本稿を執筆できました。また、模型写真では一部2011年度の作品も掲載しました。学生の皆さんに加え、非常勤講師のお二人、ゲストコメンテーターの皆様など、本課題にご協力下さいました皆様に御礼申し上げます。

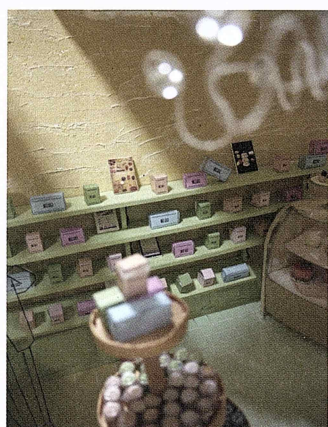
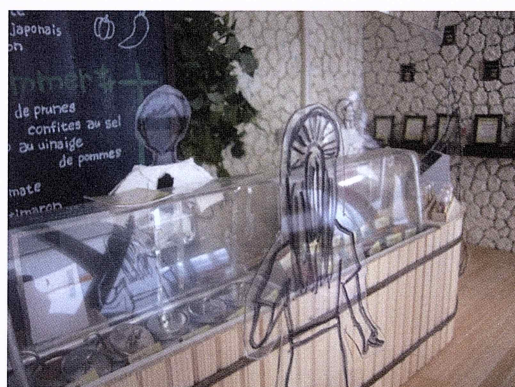




【図2】 班毎に集計したアンケート回答結果

【表3】 各班の成績

教員 / 班	A 班	B 班	C 班	D 班
阿部	75	80	80	90
イタリア人講師	85	87	95	100
フランス人講師	75	80	90	95
教員平均	78.3/100	82.3/100	88.3/100	90/100



【図 3】 模型写真（2011年の作品と2013年度の作品）

